

Title	織物問屋群生化の町の史的考察 - 日本橋長谷川町と富沢町のケース -
Sub Title	
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2005
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.48, No.3 (2005. 8) ,p.57- 70
JaLC DOI	
Abstract	本稿は、日本橋町並み商業史の一環として、人形町通りや大門通りの町の中で、最も織物問屋が群生した明治期の長谷川町と富沢町を取り上げ、その史的特徴を様々な視点から分析したものである。まず、この町々に織物問屋の群生化の兆しがみえた明治10年代について、新しい時代の織物市場の発展を指摘し、そこで出店された織物問屋の特徴を描き、町の図によってこの口ケーシヨンをみる。次で、群生化した明治30年代のこれらの町の織物問屋を表示し、伝統的な大伝馬町1丁目の木綿問屋の対し、「明治の問屋」群の誕生とその特徴をみ、殊に近江商人の進出を指摘する。次で、町の構造 = 四方向地割町型のこれらの町の構造から、二流の商業地からの上昇を背景に、地価の相対的較差の明治中期と後期との比較を図表化し、2つの町の違いを描き、更に土地所有者を記して、この町の特徴を比較する。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20050800-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

織物問屋群生化の町の史的考察

— 日本橋長谷川町と富沢町のケース —

白石 孝

<要 約>

本稿は、日本橋町並み商業史の一環として、人形町通りや大門通りの町の中で、最も織物問屋が群生した明治期の長谷川町と富沢町を取り上げ、その史的特徴を様々な視点から分析したものである。まず、この町々に織物問屋の群生化の兆しがみえた明治10年代について、新しい時代の織物市場の発展を指摘し、そこで出店された織物問屋の特徴を描き、町の図によってこのロケーションをみる。次で、群生化した明治30年代のこれらの町の織物問屋を表示し、伝統的な大伝馬町1丁目の木綿問屋の対し、「明治の問屋」群の誕生とその特徴をみ、殊に近江商人の進出を指摘する。次で、町の構造＝四方向地割町型のこれらの町の構造から、二流の商業地からの上昇を背景に、地価の相対的較差の明治中期と後期との比較を図表化し、2つの町の違いを描き、更に土地所有者を記して、この町の特徴を比較する。

<キーワード>

人形町通り、大門通り、織物問屋の群生、呉服太物商、金巾、モスリン、洋反物問屋、唐物商、地番とロケーション、長谷川町の織物問屋、富沢町の織物問屋、売上納税額、大伝馬町1丁目木綿問屋、江戸問屋と明治の問屋、問屋が問屋を生む、同郷同業、四方向地割町型、二流の商業地、地割別地価、地籍台帳、東京地所明細、地価の相対的較差、地価指数、北高南低、土地集中度、土地集積

はしがき

これまで、筆者は著書や本誌の論考で、¹⁾人形町通り界隈の織物問屋の群生についての史的な考察を行ってきたが、更に前稿では久松町の街並みの形成に大きな意味をもった長谷川町と富沢町の町の構造をとりあげ、これらの町の「商業的同質化」に言及した。²⁾

1) 白石孝『日本橋界隈の問屋と街』、『日本橋街並み商業史』、『日本橋街並み繁昌史』及び「織物問屋群生の史的背景と特徴」(三田商学研究第46巻第2号)など。

2) 「町の商業的同質化」(三田商学研究第47巻第2号)。

表1 人形町通り・大門通り界限織物問屋町別数(明治31年)

町名	A	B	C	D	E	計	町名	A	B	C	D	E	計
小伝馬上町	0	0	0	0	0	0	新材木町	0	1	4	2	1	8
亀井町	0	0	0	0	0	0	新乗物町	0	2	1	5	2	10
小伝馬町1丁目	0	0	0	0	0	0	岩代町	1	0	0	0	0	1
小伝馬町2丁目	0	0	0	0	0	0	長谷川町	10	2	14	8	4	38
小伝馬町3丁目	0	0	0	2	0	2	富沢町	6	8	3	14	4	35
大伝馬町2丁目	3	0	0	3	0	6	葺屋町	1	1	0	1	2	5
通旅籠町	1	0	5	1	3	10	堺町	2	0	0	3	2	7
通油町	3	2	5	4	2	16	新和泉町	1	0	1	0	1	3
堀留町2丁目	1	2	2	1	1	7	高砂町	0	0	0	0	0	0
堀留町3丁目	0	0	2	0	0	2	芳町	0	0	0	0	0	0
田所町	3	0	10	5	4	22	住吉町	0	0	0	0	0	0
新大坂町	3	1	6	4	2	16	浪花町	1	0	0	0	0	1
元浜町	2	1	6	4	2	15	新葭町	0	0	0	0	0	0
弥生町	1	0	2	0	1	4	元大坂町	0	0	0	0	1	1
							合計	39	20	61	57	32	209

明治31年「日本商工営業録」より作成

A=木綿, B=木綿金巾, C=木綿太物, D=呉服太物, E=毛織洋反物

本稿では、この界限の中でも、織物問屋が群をぬいて多いこの長谷川町と富沢町について、更に詳しく、町の構造や織物問屋街化の姿を分析し、2つの町が商業的に同質のようにみえても、そこに異なる特徴があることを、更に町内の地価較差の変化や土地所有などからも明らかにして、明治・大正期の日本橋織物問屋街化の史的考察の一環とするものである。

1. 織物問屋街化初期の町

この人形町通りや大門通りに接する町は、明治～大正期には、江戸時代からの継承で、実に28ヶ町にのぼる。表1はこうした町々の、明治31年における、木綿・木綿金巾・木綿太物・呉服太物・毛織洋反物などを業とするいわゆる織物問屋(卸商)の数である。ここには糸や足袋地、帯地、蚊帳、古着、洋傘などを扱うものや兼業者などを含まないが、合計して209店の多きに達している。特に、10店以上のある町も多く、北から通旅籠町、通油町、新大坂町、元浜町、弥生町、田所町、新乗物町、長谷川町、富沢町だが、なかでも長谷川町には38店、富沢町には35店もあり、その数は群をぬいているといえる。

3) この表1の間屋数と前掲書『日本橋街並み繁昌史』の表6—6のこの界限の5つの町における織物問屋数との違いは、この除いた業種の相異による。

もちろん、江戸時代からすでに、長谷川町には、呉服問屋の田原屋庄左衛門、近江屋卯兵衛、富沢町には、古手問屋のほか、呉服問屋として近江屋喜右衛門、富田屋源七、大黒屋又兵衛、樋屋彦右衛門、それに呉服太物の丁字屋伊兵衛などの店があったように、古くからここには織物問屋のかなりの大店があったことは事実であり、したがって、ここに明治～大正期に織物問屋が群生しても不思議ではない。しかも、この2つの町は、長谷川町が3916坪、富沢町が4286坪で、上記28ヶ町の中でも比較的広く、この群生を物理的に可能にしたといえよう。

とはいえ、江戸時代には、別稿で度々指摘したように、人形町通りの南は武家屋敷で、町屋が完全に途切れてしまっており、通旅籠町、通油町のところを横切る繁華な「本町通り」からは、人形町通りは単なる横道にすぎず、この境界は二流の商業地とってよかった。それが明治になって一変する。人形町通りの南の武家地が町となり、浜町川入堀以南の地域に続々と町が誕生するし、茅場町との間に錠橋が出来て、築地・京橋の商業圏に直結することが可能となって、この境界の商業価値は上昇をみるに至るのであった。

もちろん、明治前期の激動の時代、日本橋の商業活動は全般に著しく萎縮したものの、この境界には、新しい時代の変化がみられ始めた。表2は明治13年における長谷川町と富沢町の呉服太物商の店である。資料の上で、卸問屋と小売店とが区別できないが、長谷川町には13店、富沢町に14店もみられ、後年における織物問屋街化の兆しをうかがうことができるといえよう。そして、この背景には、横浜開港後の織物市場の変化があげられるであろう。

これについては、以前に別稿で詳述したことがあるが、特にその頃、輸入織物として注目されたのが、船来綿織物「金巾」であった。「金巾」は明治12年の大阪商法会議所の調査でも、下級品は泉州木綿と、中級品は伯州木綿と、また小幅ものは真岡木綿と匹敵すると評価され、しかも値段は国産ものよりもずっと安く、その輸入は逐年増加し、消費市場はすでに早くも拡大をみせていた。それだけに金巾の商いは大きな利益を生み、この輸入引取商でありかつ国内の卸を営む店は、急成長をとげていった。表2の富沢町における前川太郎兵衛店もこの最たるものであったし、また2番地の西彦兵衛店も金巾を扱って発展してゆく店の1つであった。

更に、船来織物として、当時、新しい市場を形成していったものに、薄手の毛織物「モスリン」があった。これは従来の織物の絹・木綿・麻の市場への新たな参入であり、その品質から一躍「明治の寵児」として流行していった。ただこれまでモスリンのような羊毛を素材とする織物の生産も染

4) 岸井良衛『江戸・町づくし稿』pp.208-209。

5) 坪数は『日本橋区史』による。大正4年の町の坪数。

6) たとえば、白石孝前掲書『日本橋街並み繁昌史』p.226。

7) 『東京商人録』明治13年7月（湖北社刊）の呉服太物日本橋区より作成。なお他の町については白石孝前掲書 図6—10。

8) 白石孝「明治期の洋反物輸入と東京織物問屋一時代と商人の経営史」（慶應経営論集第14巻第1号）。

9) 『横浜市史』第3巻 p.244, 白石孝前掲論文 p.79。

表2 明治13年呉服太物商

長谷川町 6	建石三藏	✓	富沢町 1	福地五兵衛	
8	小川和助		1	横山五兵衛	✓
9	中村興吉	✓	2	西彦兵衛	✓
9	柴崎栄次郎		3	服部又次郎	✓
10	平岩佐吉	✓	4	藤井甚兵衛	
11	石原繁三郎	✓	6	外村與左衛門	
11	久野清次郎	✓	10	横田六之助	✓
12	川嶋齋兵衛	✓	10	菊池治兵衛	
12	瀧川松兵衛	✓	11	小杉源四郎	
14	山下忠七郎	✓	12	片岡幸八	
15	松本太兵衛	✓	13	鈴木金八	
17	齋藤林蔵		15	大久保源兵衛	✓
18	松本市兵衛		17	吉川半兵衛	
			19	前川太郎兵衛	✓

明治13年『東京商人録』「呉服太物」より

✓印は、明治31年『日本商工業録』にも記載のもの
すでにこの時期に町に店を開いていたことを示す。

めも経験がないだけに、これらはすべて外商に依存せざるを得ず、内地染めは明治中頃、国産化は20年代末から漸く始まったにすぎない。したがって、この種のを扱う洋反物問屋が輩出し、発展してゆくのは、やはり明治20年代後半からといえるであろう。表2の明治13年頃のこの2つの町の織物の商いが、まだ「呉服太物」や「木綿太物」を中心としているのもそれが故である。

しかし、この「東京商人録」には、別な業種区別で「唐物商」という箇所があり、長谷川町4番地に伊勢屋坂本金之助、9番地に西村與兵衛、13番地に竹内房次郎の名があるが、これらはいずれも明治20年代には洋織物卸問屋となっているし、同様に、富沢町には1番地に富屋井上市兵衛や大黒屋島田利右衛門、5番地に市田作十郎、14番地に薩摩治兵衛の名があるが、これらもまた金巾やモスリンのようなよう織物問屋で大店に成長していった店々であった。まさに、これらは、明治の織物市場の新たな展開を物語るものといつてよからう。

表2のこうした呉服太物商リストや追加した上記の唐物商をみると、そこに早くもこの界隈への近江商人の進出をうかがうことができる。

長谷川町の近江屋川嶋齋兵衛（神崎郡南五箇荘村）、富沢町の近江屋西彦兵衛（神崎郡旭村）、近江屋服部又次郎（神崎郡旭村）、外村與左衛門（神崎郡五箇荘）などは、まさに同郷といつてよく、それに近江屋前川太郎兵衛（犬上郡高宮）、唐物商に入られている薩摩治兵衛（犬上郡四十九院村）も同じ犬上郡出身である。これに長谷川町の唐物商の西村與兵衛（蒲生郡朝日野村）や竹内房次郎（神崎郡能登村）を加えると、この時期ですら、近江商人といわれるものの進出が著しいということ

ができよう¹⁰⁾。

それでは、このような織物問屋が開業してゆく2つの町は、どのような街並みを形成していったのであろうか。これをみるために、この長谷川町と富沢町の地番を記入したロケーション図をかかげておく。

これをみると、呉服太物・木綿太物・唐物（洋織物）商、これに古着商を加えると、長谷川町・富沢町共に、A・Bブロックに集中し、栄橋への道筋にこれらの店が連なっていることがうかがえる。いい換えると、このような店々の街並み形成は、図のように、この明治13年頃では、人形町通りや大門通りといった南北の町々を貫ぬく通りとは、まだ無関係のように、それまでの伝統的な繁華なメインストリート・本町通りに並行した裏通りの街並みに集中して展開されていたといえるであろう。

2. 織物問屋街化の特徴

この長谷川町と富沢町の織物問屋は、明治20年代に入って急速に増加してゆく。それは、すでに述べた新しい織物市場の発展によるものであったが、表1にすでにかかげたように、その店の数は、明治前期に比して倍以上に達し、この界限きっての織物問屋街になっていった。表3と4はこの2つの町の織物問屋の店名・店主で、地番に○をつけてあるのが、明治13年の時にすでに店をこの町に開いていたものである。明治31年のそれぞれの町の織物問屋を、前述と同じように、地番で示すと、図2のようである。図1と比較すると、いずれの町の場合も、A・B両ブロック共に軒並み店が増えており、ここには現わさなかったが、1つの地番に3～4軒も店をかまえるに至っている。また、以前にはA・Bブロックのみにみられた店がCブロックにも、ごく限られたところだがみられるようになる。そして、このCブロックの南の部分ですら、大正期には多くの織物問屋の店で埋められてゆくのであった。

もっとも、別稿で記したように¹¹⁾、これらの2つの町の織物問屋の数は、明治30年代がピークである。大正期には、店の中に閉業あるいは廃業、移転するものもあり、新しくこれと入替えに生れた店を勘案しても、長谷川町では増加なく、富沢町の場合などは若干の減少をみているからである。

それでは、この明治31年頃のこれらの町における織物問屋にどのような特徴がみられるのであろうか。

表3と4には、織物問屋名と共に売上納税額を記しておいた。これにより売上高規模のようなも

10) これらの近江商人については『滋賀県人物史』や『神崎郡志稿』、『近江人要覧』がある。また明治・大正期創業の江州出身織物商社リストとして、松井清『日本橋堀留の研究』（明治学院大学論集61号）。

11) 白石孝「織物問屋群生の史的背景と特徴」（三田商学研究第46巻第2号）の表1—明治・大正期の町別織物問屋数。

図1 長谷川町・富沢町地番とロケーション (明治13年)

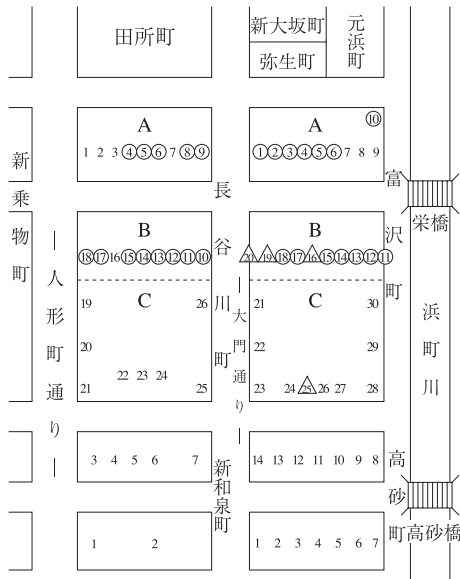
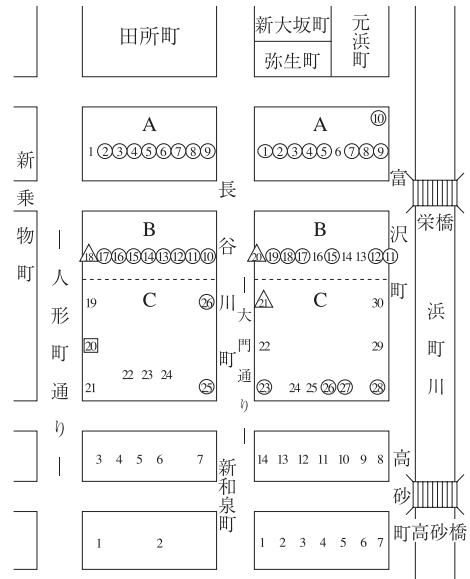


図2 長谷川町・富沢町地番と織物問屋のロケーション (明治31年)



○は呉服太物・木綿太物、唐物（洋織物）商の店
 △は古着商の店
 A, B, Cは町の構造の筆者によるブロック表示

○は織物問屋の店, △古着, □呉服小売店
 A, B, Cは図1と同じ

のを推定することができるが、今、納税額9万円以上のものを大店として考えると、長谷川町では、呉服卸の田中屋田中源治、木綿卸の下総屋建石三蔵、洋織物卸の近江屋西村與兵衛、太物卸の近江屋川島齋兵衛、呉服太物卸の亀屋山下忠七郎、洋織物卸の近江屋竹内房次郎、呉服卸の田原屋村越庄左衛門などで7店を数える。

一方、富沢町では、洋織物卸の大黒屋島田右衛門、同じく富屋井上市兵衛、金巾卸の中村合名、近江屋西彦兵衛、木綿卸の岡正・岡田正次郎、綿布の近江屋前川太郎兵衛、呉服木綿卸の伊勢屋稲村源助、大黒屋大久保久七、亀屋大久保源兵衛、堀越常七、山田定兵衛、呉服太物卸の大野屋前田兼七など12店である。

更に、この中から売上納税額20万円以上の大店を抽出すると、上記の*印の店で、長谷川町に2店、富沢町に4店をあげることができる。これは、江戸時代から木綿市場を独占的に掌握していた大伝馬町1丁目の大店をしのぐものであった。表5は当時の大伝馬町1丁目の木綿問屋の売上納税額をみたもので、長谷川町、富沢町の大店は、まさにこれに匹敵し、むしろこれをしのぐものに成長したことを示すといつてよかろう。¹²⁾これは新しい織物市場の発展を背景とした「江戸問屋」から

12) 白石孝『江戸・明治・大正史—日本橋界隈の問屋と街』p.148。

表3 長谷川町織物問屋 (明治31年)

地番	店名店主	業種	売上納税額(円)	地番	店名店主	業種	売上納税額(円)
2	田中屋田中源治	呉服卸	96,000	⑨	近江屋西村興兵衛	洋織物卸	267,660
2	田中屋田中源四郎	太物卸	10,800	10	油屋植村儀兵衛	太物卸	24,180
2	美濃屋高橋磯吉	太物卸	30,660	10	山本元三郎	太物卸	63,420
2	金子屋新井文吉	木綿・ネル卸	17,450	11	福永幸兵衛	呉服卸	67,000
3	丸山嘉兵衛	太物卸	64,500	⑩	柳屋石原半三郎	木綿卸	47,400
④	伊勢屋坂本金之助	洋織物卸	82,800	⑩	福永屋久野清次郎	呉服木綿卸	44,200
5	近江屋外村久治郎	木綿卸	25,600	⑫	近江屋川島齋兵衛	太物卸	137,100
⑥	下総屋建石三蔵	木綿卸	94,600	⑫	上野屋滝川松兵衛	木綿卸	67,520
6	三河屋家島タメ	洋織物卸	57,640	13	三河屋家島猪三郎	金巾木綿卸	31,600
7	近江屋伊藤万助	太物卸	70,860	⑭	亀屋山下忠七郎	呉服太物卸	295,080
7	須関準平	太物卸	16,840	15	大黒屋加藤善右衛門	太物卸	56,120
7	蔦屋有田安之	太物卸	15,340	⑮	松本屋松本太兵衛	呉服卸	80,200
7	中川平七	太物卸	36,920	⑯	近江屋竹内房次郎	洋織物卸	133,360
8	貫田亀之助	太物卸	12,760	17	伊勢屋尾崎善兵衛	太物卸	30,960
8	関沼松五郎	木綿卸	37,000	25	石島福次郎	呉服卸	20,200
8	中根嘉助	呉服卸	28,700	25	丁子屋下田助次郎	綿糸織物卸	54,200
8	外村弥次右衛門	木綿卸	25,100	25	村田屋村田宗次郎	太物卸	27,840
9	住吉屋菅谷勝三郎	和洋織物卸	44,813	25	近江屋田中武右衛門	太物卸	41,810
⑨	中村屋中村与作	木綿卸	52,600	26	田原屋村越庄左衛門	呉服卸	127,840

井出徳太郎編『日本商工営業録』(明治31年9月刊)より作成。○印は明治13年と同じ。
表2及び本文参照。

表4 富沢町織物問屋 (明治31年)

地番	店名店主	業種	売上納税額(円)	地番	店名店主	業種	売上納税額(円)
1	遠州屋横山五兵衛	呉服木綿卸	84,465	10	伊勢屋稲村源助	呉服木綿卸	267,000
①	大黒屋島田利右衛門	洋織物卸	151,400	⑩	万屋横田さく	木綿金巾卸	21,800
①	富屋井上市兵衛	洋織物卸	215,000	11	近江屋中村重太郎	木綿金巾卸	34,100
2	中村合名	浴衣地金巾卸	93,185	11	上野屋栗田吉之助	木綿太物卸	31,860
2	京屋桐阪よし	太物卸	55,040	11	近江屋川島市兵衛	呉服木綿卸	20,700
②	近江屋西彦兵衛	金巾染物卸	98,000	11	大黒屋大久保久七	呉服木綿卸	108,600
2	上州屋池上栄次郎	毛織物卸	83,360	12	神野清五郎	呉服卸	79,200
3	扇屋小泉えい	木綿卸	33,000	15	山添商店山添直次郎	洋織物卸	76,360
3	近江屋篠原直七	木綿金巾卸	74,560	⑮	亀屋大久保源兵衛	呉服木綿卸	230,560
3	不破佐平	木綿卸	17,800	17	小松太助	太物卸	48,900
4	岡田正次郎	木綿卸	93,480	18	堀越常七	呉服木綿卸	147,280
5	野村善助	木綿卸	42,900	18	山田支店山田定兵衛	呉服卸	98,880
7	今井友之助	木綿金巾卸	70,750	⑰	近江屋前田太郎兵衛	綿布卸	250,940
7	村石商店村田綱三郎	木綿金巾卸	27,000	⑳	近江屋服部又次郎	呉服太物卸	48,140
7	平岩清次郎	呉服太物卸	26,060	26	水内屋中里金兵衛	木綿金巾卸	17,560
7	吉屋内田助七	木綿金巾卸	30,940	27	戸田屋小林大助	呉服木綿卸	64,500
8	殿村屋辻金之助	木綿金巾卸	45,680	28	大野屋前田兼七	呉服太物卸	103,300
9	大橋藤八	呉服卸	52,400				

資料表3と同じ。○印は明治13年と同じ。表2及び本文参照。

表5 大伝馬町1丁目木綿問屋

業種	店名店主	売上納税額(円)
木綿卸	川端屋田中次郎左衛門	453,879
木綿太物卸	川喜多川喜多久兵衛支店	355,117
木綿卸	錦屋長井久郎左衛門	237,000
木綿卸	丹波屋長谷川次郎左衛門	187,600
木綿卸	大和屋長谷川九郎左衛門	171,000
木綿卸	伊勢屋小津清左衛門	136,000
木綿絹糸卸	丹波屋長谷川次郎左衛門	111,000
木綿卸	松坂屋伊藤次郎左衛門	98,000
呉服木綿卸	榎屋久須木七左衛門	11,000

『日本商工業録』明治33年より

「明治の間屋」への変革の象徴といえるものであった。

もちろん、この新しい時代の本店の中には、事業に失敗し閉店を余儀なくされたものもある。上記の富沢町の洋織物問屋・富屋井上市兵衛店もそうだったし、また呉服木綿の堀越常七店もこの1つである。しかし、ここでも元店員が独立して別な場所で開業するなど、新たな店が入替って生まれていった。また、長谷川町の田中源治店などからは、数多くの店が独立して開業され、それからは更に新しい店が生まれるという連鎖的増殖をみるのであった。筆者はこれを「問屋が問屋を生む」として、この境界の明治—大正期の織物問屋の群生の動態を表現してきた。これについての具体的詳述は別稿を参照されたい。¹³⁾そして、これがこの町々の織物問屋に近江出身者が多くなる所以をなすといえることができる。よくいわれる「同郷同業の街」という特徴がこれである。

3. 町の構造と土地価格・地主

それでは、こうして明治期後半に織物問屋街化した長谷川町や富沢町は、そのほかに他の町々と比較してどんな特徴をもっていたのか、またこの2つの町の間にもどのような違いがあったかを、町の構造や土地価格、土地所有などの視点から分析しておきたいと思う。

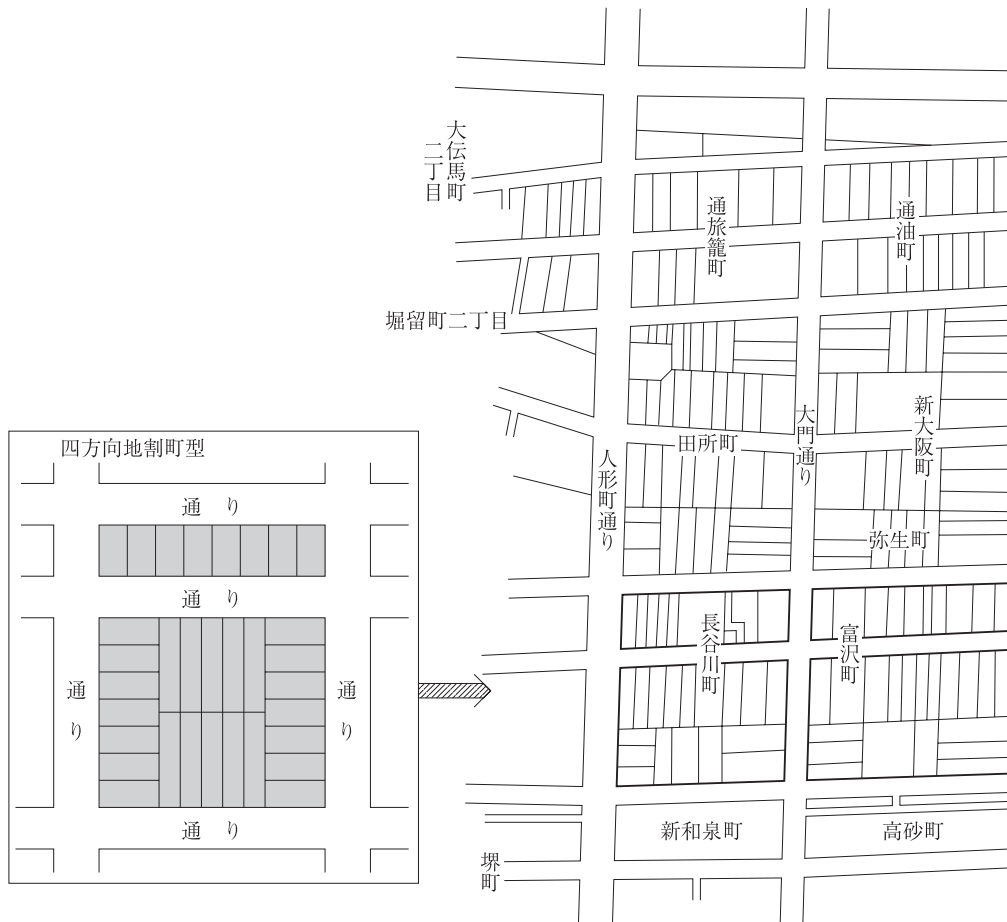
図3は、まずとりあえず、これらの町の型を、同じ人形町通りや大門通りに接する周辺の町々と比較してみたものである。

町の構造については、前稿でも記したが、この図のように、長谷川町と富沢町とは、他の周辺の町々とは異なり、四方の通りに面するように地割してある「四方向地割町型」であった。これは、歴史地理学的研究では、「城下町」とは違って、むしろ「城下の外」に属する「二流の商業地」の

13) 注11)論文、表3のa・b及び表4のa・b。

14) 前掲注2)。

図3 長谷川町・富沢町の町の型（明治大正期）



町型といわれる¹⁵⁾。確かに、前述もしたように、ここは江戸時代から明治初期までは、その程度の町であったといってよい。しかし、これが明治中期頃になると、次第にその商業価値が高まり、これまで述べてきたように、新しい時代を反映する織物問屋の群生した町へと変貌していったのであった。以下は、大正期に入ったこの「四方向地割町型」の特徴比較を、まず地価から試みるものである。

表6—(a)は長谷川町、(b)は富沢町の各地番別の地価である。ここでは地価の絶対値を問題にするものではないので、明治—大正の地価の変動は取りあげないし、実際の売買地価は考慮外においている。資料としては大正4年の「地籍台帳」により、また各地番の地価の相対的關係の明治—大正の変化をみるために、明治については、『東京地所明細』（明治11年9月発行、同23年11月改正）を用

15) 柴田孝夫『地割の歴史地理学的研究』p.263。

表6—(a) 長谷川町の地番別地価

ブロック	地番	坪数	地価 円 100坪当り	地価指数 2/1=100	ブロック	地番	坪数	地価 円 100坪当り	地価指数 2/1=100
A	2/1	147.55	5,000	$\frac{100}{100}$	B	15	117.60	3,700	$\frac{57}{74}$
	3	84.12	3,850	$\frac{61}{77}$		16	119.49	3,700	$\frac{57}{74}$
	4	84.31	3,850	$\frac{61}{77}$		17	131.75	4,450	$\frac{57}{89}$
	5	83.22	3,850	$\frac{61}{77}$		18/2	21.36	4,800	$\frac{91}{96}$
	6	81.03	3,850	$\frac{61}{77}$	C	19	86.31	4,000	$\frac{57}{80}$
	7	374.24	3,850	$\frac{61}{77}$		20	107.26	4,000	$\frac{57}{80}$
	8	231.00	3,850	$\frac{61}{77}$		21	134.94	4,600	$\frac{61}{92}$
	9	233.20	4,800	$\frac{76}{96}$		22	137.54	2,700	$\frac{25}{54}$
B	10	142.18	4,800	$\frac{78}{96}$		23	243.73	2,700	$\frac{25}{54}$
	11	337.75	3,700	$\frac{57}{74}$		24	140.06	2,700	$\frac{25}{54}$
	12	225.50	3,700	$\frac{57}{74}$		25	274.67	3,300	$\frac{25}{66}$
	13	89.30	3,700	$\frac{57}{74}$		26	221.48	3,000	$\frac{43}{60}$
	14	176.57	3,700	$\frac{57}{74}$					

表6—(b) 富沢町の地番別地価

ブロック	地番	坪数	地価 円 100坪当り	地価指数 2/1=100	ブロック	地番	坪数	地価 円 100坪当り	地価指数 2/1=100
A	1/1	99.10	4,800	$\frac{100}{100}$	B	15	195.46	3,700	$\frac{76}{77}$
	1/2	80.58	4,600	$\frac{(-)}{95}$		16	102.46	3,700	$\frac{76}{77}$
	3	221.21	3,850	$\frac{78}{80}$		17	96.36	3,700	$\frac{76}{77}$
	4	185.59	3,850	$\frac{78}{80}$		18/1	84.61	3,700	$\frac{76}{77}$
	4/1	65.25	3,850	$\frac{78}{80}$		18/2	74.23	3,700	$\frac{(-)}{77}$
	4/2	40.00	3,150	$\frac{(-)}{65}$		18/3	4.74	3,400	$\frac{(-)}{77}$
	5/1	44.40	3,850	$\frac{78}{80}$		19	255.07	3,700	$\frac{76}{77}$
	5/2	112.72	3,850	$\frac{(-)}{80}$		20	180.29	4,800	$\frac{91}{100}$
	6	139.34	3,850	$\frac{78}{80}$	C	21/1	77.48	3,526	$\frac{49}{73}$
	7	178.05	3,850	$\frac{80}{80}$		21/2	43.42	2,287	$\frac{(-)}{47}$
	8	143.62	3,850	$\frac{80}{80}$		21/3	69.80	2,859	$\frac{(-)}{59}$
	9/1	35.70	5,301	$\frac{83}{110}$		22	142.20	3,000	$\frac{49}{62}$
	9/2	36.97	3,922	$\frac{(-)}{81}$		23	136.68	3,000	$\frac{63}{62}$
10	44.37	3,850	$\frac{85}{80}$	24		121.72	2,400	$\frac{33}{50}$	
B	11	150.41	4,450	$\frac{93}{92}$		25	106.26	2,400	$\frac{33}{50}$
	12	87.16	3,700	$\frac{76}{77}$		26	163.70	2,400	$\frac{33}{50}$
	13/1	49.20	3,700	$\frac{76}{77}$		27	116.73	2,400	$\frac{33}{50}$
	13/2	30.58	3,400	$\frac{76}{70}$		28	171.18	3,100	$\frac{59}{64}$
	13/3	114.90	3,700	$\frac{76}{77}$	29	156.10	2,800	$\frac{48}{58}$	
	13/4	98.77	3,700	$\frac{76}{77}$	30	168.09	2,800	$\frac{48}{58}$	

表6—(a)(b)共 坪数と地価は大正4年、地価指数2/1=100

()は明治23年の地価より作成。

資料 明治23年は『東京地所明細』大正4年は同年地籍台帳(日本橋区史より)

いている。そして、各町とも図1のようにA・B・Cのブロックに地番を区切り、その地番の箇所のロケーションを示しておいた。そして、2つの町ともに、1番地価の高いところ、長谷川町ではAブロックの人形町通り際の角、地番の2/1、富沢町ではやはりAブロックの大門通り際の角1番地を100として、各地番の地価を指数で記した。下欄数字が大正4年、上欄()内数字が明治23年である。

これを図表化したものが、図4—(a)、(b)である。(a)の長谷川町についてまずみってみると、明治23年(実線)と大正4年(…線)の各地番の地価の相対的較差を現わす線の形状はほぼ同じである。しかし、明治には低く評価されたところの較差はやや縮まり、いわば底が上がってきていることがうかがえる。たとえば、Cブロックの22、23、24、25番地は、21番地の25%程度の地価であったのが、大正には50%と上昇をみせているからである。そして、21番地は60%だったものが92%と大幅な上昇を示す。ここは人形町通りの面したCブロックの角地である。

一方、富沢町の図表(b)をみると、長谷川町と違って、明治・大正共に形状だけでなく、A・Bブロックについての較差が変わっておらず、いわば、評価に変化がみられないといってよい。もちろん、Cブロックの24番地から27番地については相対的に底上げになっている点で長谷川町の場合と同じである。ただこの図にみるように、Aブロックの9番地はその1部 $5/1$ だけは、大正4年には指数110で高評価だが、この理由は定かではない。

こうして地価を指数化して図表化してみると、総じて、この2つの町については、南北の人形町通りや大門通りが、その商業価値を必らずしも左右するものではなく、この界隈の街の伝統的な北高南低の商業的性格を反映したものだといえるのではなからうか。また同時に、富沢町のような上記の背景には、明治中期からの織物問屋街化という現象の進展があり、早くもこれがこの町の商業的価値を決定していたとみなしてさしつかえあるまい。

それでは、こうした2つの町の土地所有からどんな特徴が見出されるだろうか。表7—(a)と(b)は地番別にみた明治45年の土地所有者リストである。これをみると、この2つの町には、土地所有に関して、かなり大きな違いがあるといえる。

まず、長谷川町は3916坪の町で、富沢町の4286坪と若干の差があっても、地主数はわずかに9人であるのに対し、富沢町は26人の多きにのぼる。殊に、長谷川町では建石今が10ヶ所、村越庄左衛門が6ヶ所と、合計して全体の60%の土地を所有するなど、その集中度は著しく高い。もっとも、この傾向はすでに以前からみられる。同表の(c)は、この長谷川町の明治9年の時の土地所有者リストである。これにより、建石・村越家がいかに土地集積を更に進めたかがうかがえよう。そして、この両家の土地所有をみると、明治45年には、建石今は、東京に44ヶ所22,379坪、内日本橋区内15ヶ所、村越庄左衛門は36ヶ所10,336坪、内日本橋区内に11ヶ所の土地を所有しているのであつ¹⁶⁾た。

16) 『地籍台帳・地籍地図(東京)台帳』明治45年による。

図4—(a) 長谷川町地番別地価指数 2/1番地=100
(明治23年と大正4年比較)

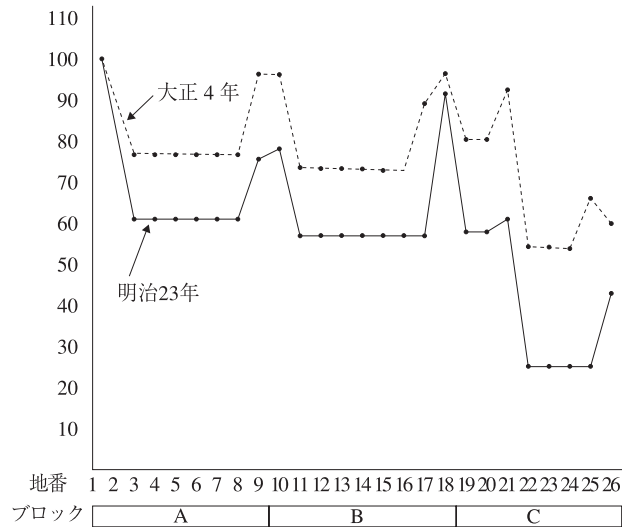
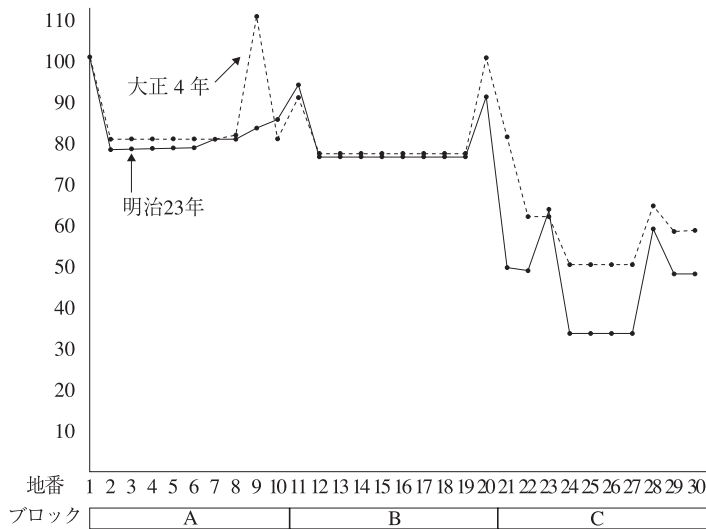


図4—(b) 富沢町地番別地価指数 1番地=100
(明治23年と大正4年比較)



これに対して、富沢町の場合は、表にしなかったが、明治9年よりの土地所有者は、わずかに、池上栄次郎、堀江半兵衛、大久保源兵衛、前川太郎兵衛の4人で、あとは入替っており、また表(b)のように、所有は多くのものに分散しているのがであった。町外を含めての土地の大所有者はわずかに前川太郎兵衛ぐらいのものである。前川は当時、屈指の大店であったが、東京に5ヶ所、7363坪、内日本橋区内2ヶ所の土地を所有していたものである。前川太郎兵衛については、筆者の『日本橋

表7—(a) 長谷川町土地所有者(明治45年)

地番	所有者 住居地	所有者名	備考	地番	所有者 住居地	所有者名	備考
2/1	新材木町	西沢善七	織物卸	15	当町	松本豊太郎	織物卸
3	〃	〃	〃	16	〃	建石今	〃
4	当町	村越庄左衛門	〃	1	〃	〃	〃
5	〃	建石今	〃	18/2	〃	〃	〃
6	〃	〃	〃	19/1	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	20/1	〃	〃	〃
8	三重松阪	小津清左衛門	紙卸	21/1	〃	〃	〃
9	京都	湯浅タケ	鉄鋼卸	22	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	23	〃	村越庄左衛門	〃
11	神田	伊東茂右衛門	質商	24	〃	〃	〃
12	当町	片岡邦作	—	25	〃	〃	〃
13	〃	村越庄左衛門	織物卸	26	〃	〃	〃
14	〃	山下忠七郎	〃				

明治45年『地籍台帳』より作成。備考＝職業は筆者調べ。

表7—(b) 富沢町土地所有者(明治45年)

地番	所有者 住居地	所有者名	備考	地番	所有者 住居地	所有者名	備考
1/1	当町	井上市兵衛	織物卸	15	当町	大久保源兵衛	織物卸
1/2	〃	〃	〃	16	〃	〃	〃
2	〃	池上栄治郎	〃	17	久松町	永田増子	絹屋 呉服古着卸
3	本郷	堀江半兵衛	質商	18/1	当町	堀越文右衛門	織物卸
4/1	当町	岡田政次郎	織物卸	18/2	京都	山田合名	〃
4/2	〃	〃	〃	18/3	当町	前川太兵衛	〃
5/1	〃	木内松蔵	〃	19	〃	〃	〃
5/2	元浜町	菊池長四郎	織物卸	20	桧物町	川崎銀行	〃
6	山梨	鈴木中兵衛	〃	21	当町	才木うら	才木栄蔵 蒲団カヤ卸
7	元浜町	菊池長四郎	織物卸	22	長谷川町	建石今	織物卸
8	当町	稲村源助	〃	23	〃	〃	〃
9	北鞆町	浅井トメ	〃	24	当町	木内松蔵	〃
10	当町	稲村源助	織物卸	25	〃	〃	〃
11	〃	片岡幸八	足袋地卸	26	〃	大久保源兵衛	織物卸
12	〃	〃	〃	27	〃	伊東喜助	質商
13/1	〃	青木辨次郎	織物卸	28	〃	〃	〃
13/2	〃	金子佐兵衛	毛織洋傘卸	29	〃	前田兼七	織物卸
13/3	〃	神野徳五郎	織物卸	30	神田駿河台	薩摩治兵衛	〃
14	〃	金子佐兵衛	毛織洋傘卸				

原資料 表7—(a)と同じ。

表7—(c) 明治9年の長谷川町土地所有者リスト

1	本町	後藤はな
2	新材木町	西沢善七
3	〃	〃
4	南茅場町	大井てる
5	堀留町	牧田清左衛門
6	㊦	建石三蔵
7	〃	〃
8	三重松阪	小津清左衛門
9	通油町	湯浅七左衛門
10	㊦	村越庄左衛門
11	小舟町	村山太郎吉
12	〃	〃
13	㊦	片岡邦作
14	〃	村越庄左衛門
15	〃	建石三蔵
16	〃	村越庄左衛門
17	〃	建石三蔵
18	〃	平井長吉
19	〃	村越庄左衛門
20	東紺屋町	前橋爲三郎
21	㊦	金井金次郎
22	〃	建石三蔵
23	〃	〃
24	〃	〃
25	〃	村越庄左衛門
26	〃	〃
27	〃	村越志か
28	〃	村越庄左衛門

明治9年「地主名鑑」より

㊦は当町居住者

¹⁷⁾堀留・東京織物問屋史考』を参照されたい。富沢町にはこれ外には、町内外に1,222坪所有の大久保源兵衛ぐらいのものであった。その点で、長谷川町とは大きく異なっている。しかし、所有者の職業は、表のように、やはり2つの町共に、圧倒的に織物問屋が多く、これにも、この界隈の街並みの史的特徴をみることができるといえるのではなるまいか。次稿で更に震災後に富沢町に編入された元浜町・新大坂町・弥生町について分析を進めてみたいと思う。

17) 白石孝『日本橋堀留・東京織物問屋史考』前川太郎兵衛 pp.80-84。